

聖書日課 『からし種』 2024.7.7-7.14

<p>7月7日 (日) イザヤ 30章</p>	<p>「今、行って、このことを彼らの前で／板に書き、書に記せ。それを後の日のため、永遠の証しとせよ」(8節)。「聖書」は、信仰者たちが主の臨在とみこころを記した証しの書集であると言えるだろう。自分たちが世を去った後の日、誰かが読むことを思えば大きなチャレンジであったに違いない。それを今読む我々も、どう受け取っていくかにチャレンジを感じる。</p>
<p>8日 (月) イザヤ 31章</p>	<p>「彼らは戦車の数が多く／騎兵の数がおびただしいことを頼りとし／イスラエルの聖なる方を仰がず／主を尋ね求めようとしなす」(1節)。主を尋ね求める、それは良い。だが、何を願ってか。敵を叩き潰すことを願うなら、戦車や騎兵に頼ると変わるまい。和解の道を行く知恵と勇気を願うからこそ、十字架で敵意を滅ぼしてくださった主を尋ね求めたい。</p>
<p>9日 (火) イザヤ 32章</p>	<p>「正義が造り出すものは平和であり／正義が生み出すものは／とこしえに安らかな信頼である」(17節)。15節から始まるこの箇所では、正義はどのようなものかが語られる。それは、我々の上に天から霊が注がれる時に現れ、荒れ野が園になったところに住まう。平和を造り出し、信頼を生み出す。闘争を生み出し破壊する言動は、神の正義ではないと知る。</p>
<p>10日 (水) イザヤ 33章</p>	<p>「主よ、我らを憐れんでください。我々はあなたを待ち望みます。朝ごとに、我らの腕となり／苦難のとき、我らの救いとなってください」(2節)。敵に対する激しい怒りの噴出の間に、この切なる嘆きの祈りが顔を出す。怒りは自分の痛みを隠す二次的感情だと言う人もいる。イエスは私たちの怒りの陰にある痛みをご覧になって十字架にかかれたのだろうか。</p>

大井バプテスト教会

聖書日課 『からし種』 2024.7.7-7.14

<p>11日 (木)</p> <p>イザヤ 34章</p>	<p>「天の全軍は衰え／天は巻物のように巻き上げられる。ぶどうの葉がしおれ／いちじくの葉がしおれるように／その全軍は力を失う」(4節)。本章は「エドム」という国名を象徴的に用い、主がひとたび怒りを発せられればどれほど恐ろしい力を奮われるかを警告している。この主を前に私たちは何を期待して他国を襲い、誰を恐れて軍備を増やすのだろうか。</p>
<p>12日 (金)</p> <p>イザヤ 35章</p>	<p>「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ／砂漠よ、喜び、花を咲かせよ／野ばらの花を一面に咲かせよ」(1節)。「咲かせよ」と呼ばれる預言者は、きっとまだ荒れ渴いた地に立ちながら、救いの喜びを取り戻せ！と叫んでいる。荒れた世に、渴いた心に、私たちはどんな花を咲かせようか。愛、感動、召命感。花は実を結ぶ希望のもとに咲く。どんな実を祈り求めようか。</p>
<p>13日 (土)</p> <p>イザヤ 36章</p>	<p>「ハマトやアルパドの神々はどこに行ったのか。セファルワイムの神々はどこに行ったのか」(19節)。なんと多くの「神々」を私たちは掲げてきたことか。それらも、たまたま力のあったひとりの人間に、ことごとく無力にされてしまう。しかしその人間も、やがて自分の「神」の前で、身近な人間に殺されていく。そんな中私たちが本当に頼みとするのは誰だろうか。</p>
<p>14日 (日)</p> <p>イザヤ 37章</p>	<p>「はるか昔にわたしが計画を立てていたことを。いにしえの日に心に思い描いたことを／わたしは今実現させた」(26節)。ヒゼキヤ王がイザヤに懇願したように、私たちは眼前の危機からの救いを願う祈りが多い。しかし神は私たちの思いをはるかに超え、いにしえの日から思い描いていた救いを実現されていく。スケール大きな神の働きに信頼していこう。</p>